

●「文学街」228号（東京都）

とにかく228号というのは凄い。昔、鉄人28号というロボット漫画があったが、その前にさらに百が2つ付いた号数を発行してきているのだ。表紙を開けると「今年もやります」と書いてあるのがさりげなく、いい。

荒井登喜子「裸の女王」（全国同人雑誌・結社推薦作品―山音文学―）が巻頭から八割方を占めている。出だしは、どこか荒みほんやりした「私」の感覚で描かれている。なぜだろう？ 分かった。これは引きこもりになった若い女性の目から見た世界なのだ。そして父も母も頼みの妹も、この「私」―姉の家庭内暴力に耐えかねて家を出ていってしまったのだ。「私」とは、いじめがきっかけで中学二年生頃から二十一歳になるまで、実家の米屋の二階でひっそりと生きてきた女性だったのだ。

やがてお金も底を突き、しかたなくアルバイトを探し始める。しかし見つからず窮していく……公園に何日も居つづける中、声をかけてきた者がいた。それはレズビアンバーの主人、イツキだった。そのイツキも父親を自殺で亡くした過去があった。そんな人生の先輩に出会って息を吹き返す「私」。

しかし、その小社会―レズビアンバーでも、やってくるとお客から軽い「いじめ」を受け、「私」はそこからさえ逃避してしまう。しかし、イツキの介入によって再び立ち直り、家族のありがたさを再認識し仕事に向って行く。ラストはこうだ。

《私は二つのグラスを、しっかりと手に持った。ひきつった笑顔を作り、またカウンターへ戻っていく》。
ストーリーはけっこうストレートだ。レズビアンバー？ それだけで奇を衒ったと思う読者もいるかもしれない。しかし感覚の新しさのみが求められ賞を与えられ商品化される……そんなレベルを超えたものがこの作品には感じられる。読む事によって実際に立ち直る読者が出てくるのではないか、そんな気にもさせる言

葉の力をこの作品はもっている。

出だしの引きこもりの感覚はみずみずしい。困って公園に居つづける自分への自意識もリアルだ。レズビアンバーの描写もよく伝わってくる。現実的には、そんなにならなく行かないよ、そんな人生との先輩に出会うことも偶然ではと思う読者もいるかもしれない。しかし、我々の人生そのものはすべて一回性の異なる状況との遭遇だ。そこにおいて、こんな出会いも大きな希望として感じられる。

現実に百万人はいると言われる引きこもり。その現代の大きな病理を一つのケースとして内側からみずみずしく描きながら、家族や他者との関係の有り難さを感じさせる。文学のもつ本来の力が、広く読まれるべき資質が、ここにはある。

●「芸驢馬」52号（東京都）

これも地道に続けられてきた同人誌である。この同人誌の特徴は、評論家である編集・発行人が《編集者の視点から》と題して、巻末で掲載作品すべての批評をしている点である。その評がまことに當を得ていて、同人たちの成長と歩みを並行させているのだろうと感じさせる。

新村苑子の「灯り」は、中越地震に題材をとった作品である。その意欲をまず買いたい。そして作者は会話、主人公の内的独白などを多用することによって臨場感を盛り上げている。ただ状況説明に陥るのは避けるべきだが、明るさへの方向のみならず、天災によって生み出された人間の不条理性へのまなざしをどこか読みたい気もした。

村伊作「駅前」は、知恵遅れのような同級生だった女性との再会により、当時の思い出を呼び覚ます小説である。一緒の時を過ごした過去を回想するには、それを共にした仲間が必要である。それが、初恋の人とは対極に近い女性であるということも、また意識のあり様として興味深い。ただラストでその女性を死んだことになってしまうのは、都合良すぎでは。

室生有紀「線路の先」は、数枚のエッセーである。しかし言葉に託す書き手の思いと読む側の投影の、交錯とギャップをさりげなく浮き彫りにさせている。

●季刊「遠近」創刊10周年記念特集号（東京都）

多くの同人誌を育てられた故久保田正文氏、のお弟子さんたちによって続けられている同人誌である。けっこう読み応えのある作品が載っている。中でも藤野秀樹の「忘れ去られた犬たち」は、おもしろかった。アイボと呼ばれた電化製品のロボット犬の話。命と電化製品の対比がうまく描かれ、哀愁を感じさせる作品である。

難波田節子の「隣人」は二つの家族の交流を描いた作品だ。主人公は義父と生活している。隣人の老人家族は少し複雑で、息子が一人である。その息子の妻子は受験のため離れて生活しているとのこと。やがて隣の老人は、相手をするという名目で義父の所にやってきては食事までしていく。迷惑に感じつつ、それでも拒否できない隣人との関係を、淡く掬い取った秀作である。

逆井三三「乞食の剣」は一風変わった剣豪小説である。主人公柳生十兵衛の主君家光や父親との葛藤、そして妻たみとのやりとりなど、なかなか読ませる。ただ構成にやや難があるのと、剣豪は芸術家だと言いつつ作者の持論が少し独善的に感じられる。

●無料雑誌「とりあえず」No.1（東京都）

インターネットの掲示板のような言葉が並ぶ雑誌。ただ鈴木慧の「満月のソフ」は独特の味わいがある。折れることをしない妻と離婚した僕は、友人の女編集長と付き合う。しかし結局一線は超えない。それだけの不発小説なのだが雰囲気がある。《呑み明かした朝は、先ず握力から衰えるのだ》なんてけっこうリアルティが感じられる。

●「照葉樹」2号（福岡県）

二人の書き手の同人誌。水木怜「秋の匂い」は父を亡くした主人公の女子と母のいない男子の淡い交情の

物語。しかし大人同士が愛し合う中、主人公は死んだ父親への思慕から葛藤をもつ……情感はあるのだが、ラストで母親を急逝させてしまうのは不自然。

●「垂水薫の『夏トカゲ』」は、なかなか読ませた。成績のいい中学生の千紗都は、やばい系の桃子に誘われる。桃子はトカゲを飼っていたのだ。家庭的な状況から就職を考える桃子と進学へ向う千紗都のそれぞれが、トカゲという生き物へ思いを投影させる。トカゲが異様に出てきたり、それを殺したり……の描写がなかなか読ませる。ただ、この二人がなぜそこまで「まなざし」を共有できたのか、その理由があまり伝わってこない。そこを描けたら、少女たちの心の壁がリアリティをもつて開示できたかもしれない。

●「ベルク」山の文芸誌102 (東京都)

まず表紙をめくると白黒の草原の写真がある。郷愁を感じさせる。山の紀行のしみじみとした文が続く。中でも荻生田浩の「春の背中」は、登山と人生が重ね合わされ臨場感を持って読めた。「こんなはずじゃなかった。かつては、私がほかの登山者を追い越して歩いていたのだ……」からは、作者の思いがよく伝わってくる。人は仲間とともにありつつ、また個なのだということを感じさせる。小林理樹「京都へ」は、母を介護しつつける夫婦のつかの間の気分転換の様子が描かれていて伝わる。

最後のページに《体力にまかせてただ山に登るという行為から脱皮し、山岳文学という道を開こうとするものである》と述べられている志がいい。

●「宇宙詩人」No. 5 (愛知県)

ヨーロッパ詩人協会ともつながりのある重厚な詩誌である。優れた詩が多い。村井一朗「三重奏」、佐山広平「川の蟹よ、沢蟹よ、孤独よ」に心の季節の情感を感じた。高井泉「狼む」、みずしなさこ「星になった理由」には命の輝きの咆哮と哀しい願いを聴いた。そして鈴木孝「宇宙詩人」第5号「記・共存と自我と・5」のランボオの引用から始まる力強い詩への思

いは鮮烈だ。「いま・ここ」での存在の事実こそ、否定しえない力なのだ。

●山梨文芸協会機関誌「イマジネーション」第3号(山梨県)

重厚でありかつハンディな機関誌だ。座談会あり、詩あり、旅行記あり、エッセイありの総合誌。エッセイに入っているが、福岡哲司の「非戦文学としての小説『笛吹川』」はみごとな分かりやすい評論である。「榎山節考」を知っているとこの者の大方が、木下恵介あるいは今村昌平監督の映画で印象を語っているのと同様の事態を「笛吹川」においても避けたい」として、梗概を上げてある。「戦争は一度終了しても、また、庶民を巻き込みながら次に継起して行く。笛吹川の流れるように押しとどめようもなく。これを見抜く眼こそ七郎が生涯持ち続けていたものである」と鮮明だ。清水威「柿と武士道」は、柿の樹を象徴とした武士と庶民の間隙を描いていて分かりやすく伝わった。一方、都築隆広「お化けがよくたちよるコンビニで、フロロズンダイキリを蹴めながらチエスを指す中華服の男の子たち」は、なんだか分かりにくかった。しかもチエスのことがそれほど伝わってこない、のだがなんと言うか、こういうところに偏執的に興味を持って描こうとする姿勢は、可能性が感じられる。

寄贈誌・本 御礼

- 誌
- 「木曜日」 23号
- 「週刊ヨシノリ」 3号
- 「全作家」 65号・66号
- 「冥王星」 9号
- 「海」 73号・74号・75号
- 「槐」 25号
- 「海峡派」 109号
- 「婦人文芸」 83号



- 「季刊午前」 36号
- 「北斗」 535号・536号・537号
- 「文芸東北」 478号・489号・491号・492号
- 「相模文芸」 14号
- 「照葉樹」 3号
- 「文学街」 231号・233号・234号・235号・236号
- 「イマジネーション」 4号
- 「ちば文学」 2号
- 「雨彦」 16号
- 「樹林」 508号
- 「名古屋文学」 24号
- 「八代地人」 22号・23号・24号・26号
- 「極光」 7号
- 「京浜文学」 8号
- 「空とぶ鯨」 7号
- 「宇宙詩人」 6号
- 「じゅん文学」 51号
- 「不羈」 32号
- 「孤愁」 1号
- 本
- 「少年の海」光榮堯夫(五月書房)
- 「大戦と銃後」平山浩樹(柏樹書院)
- 「みづはなけれどふねはしる」向井豊昭・麻田圭子(BARBARA 書房)
- 「海の色」麻田圭子
- 「ピールの少年時代」クリシュナ・バルデオ・ヴァイド、長崎広子訳(財団法人大同生命国際文化基金)
- 「ポプラ並木は涙色」男澤一(二歩会出版部)
- 「幻の女」湊正和(三一書房)
- 「尾関忠雄文学全集」(巻一)巻(風媒社)
- 「詩集「雪の陽炎」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
- 「詩集「あわゆきの道」寒川靖子(喜怒哀楽書房)
- 「ジギ谷」名村和実(自家出版)

●「相模文芸」14号(神奈川県)

今号も豊かになった。詩・俳句・短歌・童謡・エッセイ・小説評論と、どの角度からも楽しめる。この幅の広さは同人個々の豊かさに裏打ちされているからで、集まっている人物群の彫りの深さと容量の大きさが窺われる。またその求心力にきわめて大きな存在がなければ、この文芸空間は成立しないだろう。賞賛すべき文芸活動である。エッセイも面白い作品が揃っているが、「百という名の犬(白銀律子)」は、犬との愛情が鮮明に描かれていて、ついもらい泣きをしてしまったほどの真情溢れる秀作になっている。

今日的な問題として「建設業の談合は無くならない(牟田ゆうじ)」は、談合の根本的な構造を歴史的な建設業の成立時にまで遡って説いている厚みは、注目すべきものがある。こうした文章は、新聞でも一般の雑誌でもお目にかからない貴重なものである。「春窮について(登芳久)」も柔らかな、しかも強靱な思考がゆったりとゆねり流れて一つの確かな世界を紡ぎ出している。深みを備えた随想である。

小説「両手にありがとう(本城確)」は脱穀機を操作中に誤って両手が巻き込まれ、失ってスタートする人生を書いているが、短い文を投げちぎり、ぶつけ重ねていくような文体は、力がある。素朴な迫力が、言葉の力となつてゆねり寄せてくる。単純で率直に見えるこの文章が、何に由来しているのかわからないが、今日の小説の文章とはまったく逆の方向を向いているそこに、逆に新鮮さを感じる。技巧に背を向けた技巧がある。同人雑誌優秀作に推薦したい作品である。

●「文芸東北」492号(宮城県)

昨年第17回東北北海道文学賞奨励賞作品「白い夏(古林邦和)」は、ベトナムのポート・ピールとして日本に来、日本人の妻となつたものの、海の藻くずとなつたはずの兄を雑誌で発見し、ベトナムに戻って再会するストーリーである。再会できた兄は、記憶をなくして、妹と最後まで認識できないところに、こ

の物語のテーマが横たわっている。ベトナムの生活の描写、ベトナム戦争中の状況など、日本にいてはとうてい書けないリアルティを備えていて、国を越えた家族の絆を求めるモチーフは残留孤児以来なかつた世界である。筆者は現在ベトナムのサイゴンに在住していて、その生活の基盤があつて初めて書ける小説であろう。筆致もしつかりしていて、姿勢も強靱なものが感じられる。よく周囲の話に耳を傾け、確実な聞き取りをしている。東南アジアを描き、かつまたベトナム戦争とその後を現地から描いた視野の広い世界はあまりお目にかからないだけに、その点でも評価される。ただ、この小説は、最も肝心な「何が兄を記憶喪失させたか」という文学としての問いかけに明確に答えていない。それは「何が兄をあえてポートピールとして命がけの海への脱出に向かわせたか」という問いへの答えと連動しているはずである。死の危険を冒させるそれは何か。それに答えていない結末が、ポートピールとして海に消えていった無数の犠牲者の声と響き合わない欠落となつて、読後の感動に結晶していかない弱点となつている。題名の「白い夏」は、兄が歌っていた歌の題名であるが、その歌が全体のテーマにふさつてこない点もそこに繋がっている。それは日本人としてベトナム人の心の傷を描くことができるか、という民族の根と文学に関わる問題をも含みつつ、事実と文学の間の重要な作業の困難を提示している。

今後日本人が海外に移住することも多くなり、また外国人も日本に多数来住し、生活もいつそう世界化していく趨勢にある。日本とベトナム、中国と日本、東と日本というふうにくロスオーバーする世界が小説化されていっている。そのとき、文学の根はどこに存在するのか、そのありかを問われることも必然であろう。そこに作家の新たな一つの仕事が存在することも胸に銘記しておかねばならない。

●「北斗」537号(愛知県)

評論「敗北してなお——カレル・チャペックと私(

竹中忍)は、柔軟な思考が縦横無尽に批評文章を駆け巡らせているのびのびした筆致で、評論のおもしろさと味わいに富んだ秀作である。時代や歴史の批評にもなっていると同時に、自然に現代の日本の出版界への批評も含んでいる所に妙味がある。洗練された批評精神と文体は注目すべきものがある。

●「海」75号(三重県)

一六四ページとボリュームもあり、全体にある程度水準の作品が揃った安定感のある同人雑誌である。「君との埋めがたい距離(小久保修)」はタイトルも変わっていて、全体に軽いタッチの進行感が快い。チンドン屋、写真サークル、学校のトイレの水浸し事件など、手際よく並べて進んで行く手腕は読ませる力を備えているが、軽みに流されてしまい、あとに残らない。小説は読み終わってあとに残る何かが必要で、それを今後一考してほしい。

「通り雨(遠藤昭己)」は、妻を亡くして三回忌を迎える男の心の動きを軸にしているが、愛人とおぼしき桃子という女性も痛で死に瀕している。その桃子に頼まれて以前の桃子の夫に会いに行ったり、亡妻の三回忌に新潟の妻の実家を訪れて再婚を勧められたり、揺れる陰影はそれとなく出ているが、核になる「死んだこと」「死に瀕している」ことが、しっかりと文学として切り結ばれていないために、ふわふわした文学風景になつてしまっている。文学的な匂いはあるが、文学はない。本来あるべき切実な問いがここでは装飾品になつてしまっている。地を掘ること、問いを掘り下げることも、もつと自分の内部に深く問いかけることをこの筆者には望みたい。

●「季刊午前」36号(福岡県)

センスのいい雑誌で、イラストも垢抜けしている。しかし今号は小説以外のものに力を感じた。

「旅行記/モンゴルに行く(吉貝甚蔵)」は丁寧な紀行文で、短期間の旅行にもかかわらず、よくモンゴルの地を描いている。挿入される詩もいい。この感性がゆ

えに捉えられたモンゴルの時空である。細かく書き留められているが、詩以外にもっと感性の翼をひろげてもよかつたかもしれない。

エッセイ「記憶の水景・父へのレクイエム」(宮本一宏)は詩性豊かな文章で、父への鎮魂に自身の半生を重ねて陰影深い旋律を奏でている。旋律は美しいが、もっと展開させ、根に力を持たせて繁茂させることができそうな気がする。「片手間」に留まるところが惜しい。連載歴史随想「長崎、さんた丸や」(加茂宗人)は長編連載だが、イエズス会の日本への布教を中心に息長く筆を進めているその発掘の根気は賞賛に値する。当時の未発達な交通手段や文化手段の下で地球の裏側まで布教に来るその情熱は、異常なものがあるはずで、そのあたりまだこれまでの日本文学は発掘されていない気がするが、その領域を丹念に掘り起こし、執筆を持続している意志は尊い。いつか大きくまとまったものになることを心から期待している。

小説「ピオラ館」(西田宣子)、「極楽荘はなし」(天谷千香子)の両方に共通して感じるのは、文章の軽快なタッチに読みやすさやおもしろさを感じるが、流れが優先されて、肝心の何を掬い取るかが、欠けている。この網では、雑魚しかかからないだろう。市民生活の快適さの中に半分埋没しているお手軽さが文体の軽快さに繋がっているとすれば、とうてい大きな病巣は摘出できない。問いが足りないと思う。

●「婦人文芸」50号(東京都)

創刊50周年記念号で、大河内昭爾氏をはじめ、名のある評論家から祝辞も載せている。五〇周年半世紀の足跡は尊い。心から祝意を送りたい。

「かげろう」(音森れん)は、やや知恵の遅れた主人公元治の生死を手堅い筆致で構築している。両親の遺産を目当てにたかる男女、また逆に愛を注ぐ女性など、脇役を善悪しつかり締めて、話を進める物語の構築力・展開力は豊かな技量を示している。息子の弁当を持って学校へ行く場面もいい。マグロ船に乗って海に死ぬ

最愛の息子を追って、海の波にさらわれて行くラストシーンは特に鮮やかで、筆者の筆力の豊かさを感じさせる。この主人公を描き切るには、こうした人間存在への深い愛情があるからで、これに根ざしたしっかりした緊張感こそが、この存在を浮かび上がらせる文体を生み出していると言える。地味ではあるが大事にしてほしい、人間の根を深くみつめる眼差しである。ただ、もっと腰を落としてじっくり筆を進めたら、さらに光を放つ場面がいくつもある。この内容での短さでは、あえて進行を速くしなければならなくなるのは必然である。肝心な部分駆り足で通過されている恨みがやや残るが、筆者の力量を感じさせる秀作である。

●「海峡派」109号(福岡県)

「花牌」(高崎綴子)は、父親に執着的にかわいがられた主人公の、老梅を燃やしながらの追懐を導入部にした短編であるが、文章のうまさ、筋の運び、シーンの鮮やかさ、エピソードの入れ方など、抜群の手腕である。これほど完成度の高い短編は、近頃の文芸誌でもお目にかからない。幼い頃父親に連れられて、麻雀荘で父親の膝の上で卓を囲む場面は秀逸で、煙草や男のおいがかしみついてくるようだ。ラストもうまい。力のある人が世には埋もれているものである。感心した。

●「樹林」508号(大阪府)

「樹林」は大阪文学学校の機関誌である。しっかりとした編集構成は大阪文学学校の層の厚さをよく表している。ただ、全体に短いものが多く、多くの人が書き寄せるためか、力作が掲載しにくいように感じた。

「家をのぼる」(若代明子)は文章の感性はみずみずしく、しかも緻密で、感覚の展開で書ける力を示しているが、舞台や材料が家族や家庭、せいぜい近所の人々に限られている人物世界の狭さがやや窮屈な気がする。文章の感性は非凡なものがあるが、小説的骨格ができれば、いっそうこの感性が生きてくると思う。骨格の構築に意を注いでほしい。

その点ではむしろ「雨曇り」(石村和彦)のほうが

小説展開の豊かさを感じる。おもしろくない企業組織での日常生活よりも、パソコンのメールやホームページのパーチャル世界の方にのめりこみがちな主人公が、このままパーチャルの世界へ行ってしまうのもか、中国人のいかわしい女性古い師に占つてもらうストーリーはユニークでおもしろい。多かれ少なかれ根をなくして仮想世界に取り込まれていく現代の浮遊性を一つの味として提示している。しかし「雨曇り」という題は、一見味がよさそうだが、よく読むともう一つ焦点を結んでいない。もっと先鋭な、腰の入った切り口を更に期待したいところだが、この機関誌の性格が、そこまで徹底的に書くことを制約している気もする。そういう意味ではどの作品も、持ち寄りのな色がある。相手と切り結ぶ鋭気が乏しい。

●「千葉文学」2号(千葉県)

A4の大きさの同人誌は、めずらしい。ワープロで版下を作っているらしい手作り感覚があるが、これも一つの味になっている。

「ホンキー・トントク・トレインに乗って」(玉田晃平)は、やはり感覚がいい。前作の「戦場のナイフ」にも感じだが、現代の都市の風景感覚を描写やテーマに生かしている才能は注目すべきものがある。ただ、それをテーマの骨格に組み入れていくには、骨格そのものの強度を高めていく必要がある。双子の姉妹がマスターを殺すその部分を安易にオチとしてだけ処理するので、はたか、それがなぜか、しっかりと問い、書き込んで、そこに一つの現代の穴を見ることができたら、成功していただろう。惜しい。安易に筆を揮わないじっくりした取り組みを期待したい。

俳句による詩は新しい試みでおもしろい。

誌面がつきたので、ここまでするが、今回は優秀作や佳作が多く、豊作だった。優秀作は「両手にありがとう」(本城確)、「白い夏」(古林邦和)「かげろう」(音森れん)、「花牌」(高崎綴子)、あとここに取り上げたものは、それに準じる作品である。